ごあいさつ

秋田市長　穂積　志

大森山動物園は、子どもから大人まで広く市民に愛される施設として、これまで1,000万人近くの方々にご愛顧、ご利用いただき、このたび開園40周年を迎えることができました。これもひとえに動物を愛する方々や関係各位のご理解とご協力の賜とお礼申し上げます。

1973年9月、千秋公園にあった児童動物園を引き継ぎ、ここ大森山公園に移転し、大森山の豊かな自然を活かしながら、ゾウ・キリンの導入や「王者の森」の建設などの整備を進め、現在、約110種740点の動物を飼育展示しております。

2010年には大森山公園と一体化し、動物園を観光資源とした将来像「大森山自然動物公園整備構想」を打ち出し、大森山公園、動物園の再整備を進めております。

現在の大森山動物園は、観光施設としてはもちろん、子どもたちが動物という「いのち」とふれあい、「豊かな感性」を育む人間形成の場として、また大人たちにとっても癒しや憩いの場として、さらには自然環境の急激な変化に伴う野生動物の絶滅が心配される中での種の保存の場、あるいは地域の元気づくりに資する場など様々な役割を担っております。

40周年を迎えた大森山動物園が、50周年、60周年と今後も市民とともに歩み、存続していけるよう、新たな視点と経営感覚で大森山動物園の運営になお一層努めてまいりますので、変わらぬご愛顧とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

祝 辞

秋田市議会議長　鎌田 修悦

秋田市大森山動物園の開園40周年、誠におめでとうございます。

また、開園以来、動物の飼育や、施設の維持・整備にあたってこられた市当局並びにご支援いただいた関係者各位のご労苦とご尽力に敬意と感謝の意を表します。

大森山動物園は40年の歴史の中で展示動物の拡大、施設の拡充や多彩なイベントを通じて日々、魅力向上に努めてこられました。動物園が千秋公園にあった頃を思い出すと、現在の成長ぶりには誠に感慨深いものがあります。

自然豊かな環境の中、様々な動物と出会える大森山動物園は、家族が集い、憩い、心身をリフレッシュするには、またとない場であり、子どもたちの健やかな感性を育み、生命の不思議や尊さを学ぶことのできる施設として、秋田市民に広く親しまれています。加えて県内外からも多くの方が訪れ、本市観光の一翼を担う重要な役割も果たしております。

また、命の尊さが叫ばれる現代社会にあって、「動物と語らう森」をテーマに、より近くで動物を体感できる動物園として、様々な企画に取り組まれているほか、秋田の自然を象徴する希少野生動物のイヌワシの繁殖や希少淡水魚ゼニタナゴ保全などにも取り組んでおります。このように、大森山動物園は施設自体の発展とともに社会や市民の成長にも貢献してきたといえます。市議会といたしましても、かけがえのない郷土のシンボル、財産である「大森山動物園」のさらなる飛躍に向け、市民の皆さまとともに応援してまいりますので、今後とも、魅力ある施設づくりに努められるよう期待申し上げます。

結びに、大森山動物園が一層市民の皆さまに愛され、ますます発展されますことを心から祈念申し上げ、お祝いのことばといたします。

記念誌の発行にあたり

園 長　小松　守

大森山動物園、開園40周年にあたり、これまでの歩みの整理と記録、そしてより広く広報できるように、機関誌コミュニケーション86号を記念号と位置づけ発行することとしました。

大森山動物園の原点は、戦後間もない1950年に千秋公園にできた児童動物園に見出すことができます。その思いは、40年前の大森山公園「大森山子どもの国」をつくるとき、中心的施設として動物園の移転という形で引き継がれ、一貫して子どもの夢を育む場として発展してきました。

今も大森山動物園は「動物と語らう森」をテーマに掲げながら、子どもの夢を育むことを主流としていますが、時代の要請に合わせ、命の教育やキャリア教育などの教育現場とつながりながら歩んできました。また、家族の語らいの場づくりが難しくなりつつある現代社会にあって、家族の「幸せ時間」や癒しを提供する場ともなるなど、その役割は広がりを見せております。一方、動物園は一つの社会資本、観光資源としての見方も出始め、企業や大学などが様々な社会活動に活用しようという動きも出るなど、見学だけの動物園から、街づくりという観点でもその役割を担うようになってきています。自然と人との共生という地球規模でのテーマの中、希少野生動物の種の保存、いのちをつなぐ場、そして自然へと誘うきっかけを提供する場としても役割を担うようになるなど、教育文化資本としての動物園を意識しつつ、未来に向けてつながり続けていこうとしています。

40周年のテーマに「つながり」を掲げていますが、本記念誌は、こうした未来への展望をも意識した編集に心がけました。限られた誌面ではありますが、40年の歴史を振り返り、こころ（情）を大事にしてきた動物園の一端を記録として後世に残しつつ、未来を展望する記念誌となれたら幸いです。

児童動物園時代
1950-1973

大森山動物園は、2013年に開園40周年を迎えました。1950年（8月）に秋田県が創設、その後秋田市が引き受け運営してきた千秋公園の児童動物園が、整備が始まった大森山公園へ1973年（9月）に移転してから40年になります。

移転が決まった児童動物園は同年8月10日に閉園し、8月15日から16日にかけて、動物たちも引っ越しました。

大森山「こどもの国」の構想の中に動物園移転が組み込まれましたが、背景には秋田県が児童会館の付属動物園として開設した後、秋田市に移管されて児童動物園として運営されてきた秋田の動物園の歴史があります。動物園の存在意義の根幹は、こどもの夢、心を育む場として捉えてきたのでした。

1953年、秋田市に移管された秋田市立児童動物園の面積は0.4ヘクタール、飼育動物は29種129点、年間利用者が15～16万人でしたが、2013年6月現在の大森山動物園は、約15ヘクタール、動物約110種740点、近年の利用者数も25～30万人と飛躍的な成長を遂げています。

入口

園内風景

お猿の電車